# 課題解決型インターンシップ

## 17プロジェクトに約100人参加

本学キャリアデザインセンターの課題解決型インターンシップは、地域の企業やNPO法人などと連携し、学生ならではのアイデアと行動力でさまざまな課題に挑戦する本学独自の長期インターンシップだ。主体的に取り組むことで課題解決力やコミュニケーション能力を養う。

14回目となる今年度は17プロジェクトに約100人が参加した。イベント実施や宣伝・マーケティングなどに携わり、地域社会の方々に支えられながら、仲間同士協力しあい課題を克服していった。

今年度の活動の一部を紹介する。

### ◆機微力検定◆

## 留学生向け新規事業紹介

教育ITソリューションEXPOに参加

課題解決型インターンシップとして初めて神田キャンパスでの実施となった。法学部生5人が参加し、留学生向け事業のリサーチ、マーケティング、実証実験を担当した。

受け入れ企業のKIBI（東京都）は外国人留学生・社員に向けた各種支援サービスを提供している。同社は、人の気持ちのちょっとした変化を察する力を「機微力」と定義。異文化間の円滑なコミュニケーションに役立つ「機微力」を数値化する「機微力検定」を考案した。

課題解決型インターンシップのメンバーは「機微力検定」の認知度を上げるためのさまざまな広報活動を担当。6月には教育ITソリューションEXPO（東京ビッグサイト）に参加した。フライヤーやパワーポイントなどを作成し、来場者を前にプレゼンテーション。このプレゼンで契約が成立し、自信を深めた。

11月には東京大学教養学部70周年記念行事の一つである国際開発学会・人間の安全保障学会共催大会に、リーダーの野口凜太郎さん（法3）ら4人が参加。国内外の研究者に向け「機微力」をアピールした。

「活動を始めた当初は何をしていいか全く分からず、やりながら学んでいった」と言う野口さん。「自由に、さまざまなことにチャレンジさせてもらい、研究者や企業の方々と知り合い、多様な価値観を知ることができた。マーケティングや経営、起業などに関心が出たので、これからも学んでいきたい」と世界の広がりを実感している。

### ◆インバウンド・プロモーション◆

## 「半日で日本一周」を企画

留学生とアンテナショップを巡ったツアー

訪日外国人は増加傾向で、2018年に過去最高の3119万人に上った。インバウンドプロモーション・コンサルティングや番組製作などを手掛けるCool Japan TV（東京都）で、学生6人が日本を訪れた外国人に、日本の魅力を発信する新企画をプロデュースした。

打ち出したのは「半日で日本一周ツアー」。目をつけたのは都心部にたくさんある全国のアンテナショップだ。今回は北海道、福島、富山、滋賀、山口、長崎の各道県のショップを回り、チーム対抗でクイズに挑戦。各店でお勧めのお土産品を購入し、持ち寄ったものをつまみながら、参加者同士で懇談した。

8月に実施し、韓国、ベトナムからの留学生計3人が参加。「留学していても首都圏以外は行ったことがない」と言い、長崎のカステラなど、各県の特産品を珍しそうに手に取り、気軽な「日本一周」を楽しんだ。

参加者には好評だったが、集客に課題が残った。ポスターやSNSでの告知がなかなかうまくいかず、「イベントを知ってもらうのは大変だと実感した」と菅原ちひ野さん（文3）。

企画も決まるまでに一苦労。メイドカフェや秋祭り巡りなど、15本以上提案したが、受け入れ先企業から「どこにでもある企画ではなく、学生だからできることを」とアドバイスを受けた。香港出身の鄭皓駿さん（経営3）は「一から企画するのは難しい。人を集めるには自分の思いを押し付けるのではなく、いろいろな努力をしないといけない」と振り返った。

### ◆たま音楽祭◆

## 笑顔で『パプリカ』踊ろう

子どもたちと一緒にダンスを楽しんだ

「アイデアを形にするには、あらゆる状況を想定すること、情報を共有することが大切だと学んだ。企画したワークショップは、参加者全員の一体感が生まれ、素晴らしいものになった」と充実した表情を見せるのは角田武厳さん（商2）。

12月7日、川崎市多摩区総合庁舎で行われた音楽イベント「たま音楽祭」で角田さんら6人は、親子向けのワークショップを実施し、イベントを盛り上げた。

同音楽祭を主催する川崎市多摩区役所からの課題は、幅広い世代のお客さんに来場してもらうこと。メンバーはTwitterでの活動報告など、若者をターゲットとした広報活動を充実させた。その一方、音楽祭の催しは大人向けのものが多いことから、子どもが親と一緒に楽しめる企画を計画した。

「みんなでおどろう！パプリカ」と題したワークショップでは、多摩区を拠点に活動する音楽グループ「ワガママSUNバンド」と協力して振り付けを指導。27組の親子が参加し、ヒット曲『パプリカ』に合わせ、笑顔でダンスを楽しんだ。

### ◆きみまち商店街◆

## 夢のお店づくりサポート

真剣に取り組む子どもたちを手伝う学生

子どもたちと一緒に地域のイベントを盛り上げたのは、山本龍生さん（文1）をリーダーとした4人。11月16日、川崎市多摩区総合庁舎近くの空き地を活用して行われた登戸まちなか遊縁地で、地元の絵画教室と協力し、体験型ワークショップ「きみまち商店街」を実施した。

子どもたちの夢のお店を段ボールでつくるワークショップには約50人が参加した。メンバーは子どもたちの作業をサポート。カラフルなアイスクリーム屋さん、特徴的な看板の猫カフェ、野球場など「こんなお店があったらいいな」と思う商店街が出来上がった。

山本さんは「子どもたちの自由な発想に驚かされた。楽しんで作業する姿を見て、企画がうまくいったことが実感できた」と笑顔で語った。

また、まちなか遊縁地のロゴを用いたタトゥーシールも考案し、地域の夏まつりなどで販売した。平尾楓香さん（経営1）は「子どもたちが面白がって手や顔に貼ってくれたので、イベントの周知につながった」と話した。

### ◆シンジョーロードショー◆

## テーマ決め上映会を演出

雰囲気作りのため畳が敷かれた肝試し上映会。鑑賞後には参加者が怪談を披露した

飲食あり、おしゃべりありの自由な空間で和気あいあいと映画を楽しむイベント「シンジョーロードショー」。JR南武線の武蔵新城駅にあるレンタルスペースで毎月行われている上映会の企画、運営、広報に渡部佑梨さん（文3）を中心とした映画好きなメンバー6人が携わった。

地元のイベントプロデュース会社・トビラが手掛けるこの上映会は2018年に始まり、メンバーは19年6月からの5回に協力。

「映画を含めた環境づくりを重視した」と渡部さん。ホラー映画を見た後、来場者が怪談やお勧め映画を語り合う肝試し上映会、会場にテントを張ってキャンプ場をイメージした空間を作り、ロードムービーを鑑賞したグランピング上映会など、毎回テーマを決めて作品を選び、会場の演出を工夫した。

参加記念にオリジナルチケットを配布するなど、新たな取り組みも好評。渡部さんは「メンバーがそれぞれの得意分野を生かし、積極的に活動してくれた。反省を次につなげ、回を重ねるごとにいい会になった。新規のお客さんが増え、成果を残すことができた」と話した。

### ◆不動産会社の新ツール開発◆

## 一人暮らし向け冊子刊行

冊子の編集作業に取り組んだ

川崎市の不動産会社エヌアセットでは、初めて一人暮らしをする学生や新社会人の不安を解消する冊子を作った。「それぞれの生活スタイルで、一人暮らしを楽しんでほしい」と呼び掛けている。

同社からの「地域密着型不動産会社の新ツール開発」という課題に取り組んだのは4人。学生を対象にしたアンケートで一番ニーズが高かった「生活費の参考資料」を冊子のテーマとした。食費や光熱費など1カ月にかかる費用の概算を紹介。一人暮らしの不安を少しでも解消できるように、食材の保存や節水の方法なども記載した。

冊子のタイトルは『M-Style』。同社の本社があり、本学の学生も多く住む溝の口の頭文字のMと、生活スタイルを組み合わせた。

高杉洋輝さん（経営1）は「チームで話し合いを重ね、試行錯誤を繰り返し、エヌアセットの社員の方々の協力で冊子を完成させることができた。今回学んだ知識やスキルを、今後の学生生活や将来に生かしていきたい」と振り返る。

半沢奈津葉さん（文3）は「さまざまな苦労はあったが、少しでも誰かの役に立つツールを作り出すことができてうれしい」と語る。

『M-Style』はエヌアセットの各店舗で無料配布している。

---

北俣地域の皆さんと小池ゼミのメンバー

## 中山間地域の高齢者ニーズ探る

## 岩手でボランティア

### 経済・小池ゼミ

社会保障や福祉を研究対象としている経済学部・小池隆生ゼミの学生28人が2019年9月3日から5日まで、岩手県で合宿を行った。少子高齢化が進んだ中山間地域でのフィールドワークを通して住民のニーズを探った。

高齢化率が50%を超えた限界集落と呼ばれる岩手県奥州市の北俣地区で、生活の困りごとをボランティアという形で支援。主な活動は、まき割りや出荷前の野菜の手入れ、畑の除草など、男手や長時間働くことができる若者の労力が必要とされる作業だ。ゼミのリーダーの長池泰蔵さん（経済3）は「地域の方と生活を共にし、交流したからこそ、人口減少による農業の担い手不足という課題が見えた。統計データなど文章化された書類や文献から想像していたものとは大きなギャップを感じた」と現状を肌で感じた。

星空日本一に輝いたことがあるほど空気が澄み渡り、自然が美しい奥州市であるが、その景観の保全や地域の伝統の建物などの手入れは住民の方々が主体となって行うことが多い。夫に先立たれ男手が足りないため、鳥居の周りに草木が生い茂ったまま、祭りの準備を満足にできないという家庭もあった。

まき割りをする学生

杉山太一さん（経済3）は「体力には自信があったが、いざ作業をやってみたら1時間通しで続けることが難しかった。これを女性だけ、しかもご高齢の方がやるのは困難なことだと思う」と思いやった。

長池さんは「今回のボランティア活動の経験は、都市部で生活する私たちが地域の実情を知る貴重な機会となった。中山間地域において、社会福祉や社会保障が十分とはいいがたい。ボランティアの重要性は十分に理解できたが、この活動をより多くの若者に知ってもらうため、活動の幅をさらに広げていく必要があると感じる。今後のゼミナールでの研究の大きなテーマの一つとして、この課題に取り組んでいきたい」と今後の活動に胸を膨らませた。

（白鳥順也・経済3）

### 商・神原ゼミ生 NHK報道番組に出演

## 商品化した籐ピアスPR

リポーターの質問に答える木下さん、中石さん、井関さん（右から）

オリジナルアクセサリー「籐（とう）ピアス」を商品化した商学部・神原理ゼミ生3人が1月9日、全国放送のNHK報道番組「ニュース　シブ5時」に生出演した。

出演したのはいずれも4年次生の井関麻祐さん、木下澄香さん、中石千夏さん。東京・新宿の百貨店で開催された東京都伝統工芸品展紹介のコーナーに登場し、籐ピアスをPR。リポーターの質問に笑顔で答え「若い人や外国人に、日本の伝統工芸の良さを知らせていきたい」と語った。

神原ゼミで商品研究を学ぶ3人は籐に興味を持ち、2年前に木内籐材工業（東京都文京区）の門をたたいた。同社三代目の木内秀樹さんから話を聞き、軽くてしなやかな籐の特性を生かしたピアスを発案。作品を次々と生み出した。籐ピアス開発は神原ゼミ全体のプロジェクトとして発展。通販やフリーマーケットなどで販売し、ワークショップも開き好評だ。昨年12月には、本学の育友会奨励賞にも輝いた。伝統工芸品展には昨年に続き参加。そうした活躍がメディアの目に留まり、今回の出演となった。

井関さんは「これまでの経験を社会人になって生かしていきたい」と話した。卒業後、3人は商品開発や通販事業などのそれぞれの道に進む。